日本フランス語学会　第 332 回例会（2020.9.26）Zoom 開催

関西学院大学非常勤
小川　彩子（ayako.ogawa.fr@gmail.com）

＜(Et) moi / 名詞句＋擬似関係節＞構文における接続詞 et の役割について
― Et は省略できるか

0. はじめに

朝倉(1984)の「[Et] moi（名詞）qui... !」の項目：

(1) *Moi qui me réjouissais de cette soirée !* (J. Anouilh, *Pièces roses*)

(2) Je vous demande de sortir. ― *Et moi qui croyais que vous m'aimiez...* (*Ibid.*)

(3) *Et votre mère qui vous croit si calme !* (M. Arland, *L'Ordre*)

(1)：強勢形人称代名詞 moi を先行詞とし、擬似関係節を用いた文⇒ ＜moi+擬似関係節＞

(2)：＜moi+擬似関係節＞に接続詞 et が前置された文⇒ ＜et moi+擬似関係節＞

(3)：名詞句を先行詞とし、擬似関係節を用いた文に et が前置された文⇒ ＜et+名詞句＋擬似関係節＞

朝倉(1984)は、これら３つの文タイプについて、「自分の考えと事実との食い違いに、驚き、落胆、まれに喜び[1]を感嘆的に表わす」表現と説明。

(4) Moi qui croyais que vous m'aimiez...

(4)：インフォーマントによると、(2)と同じ文脈でも文として成立し文意は変わらない。
⇒＜moi+擬似関係節＞は et を付けても付けなくても意味上の違いはない？

★しかし、インフォーマントによると、(5a)の＜et moi+擬似関係節＞から et を取り除き(5b)の＜moi＋擬似関係節＞にすると、文の意味が通じなくなる。

(5)（帰宅した旦那様から奥様の様子を訊かれた小間使いは、奥様の様子を報告する）

― La pauvre dame semble bien triste.

Puis avec élan：

― Mais Monsieur doit avoir faim.

a) *Et moi qui reste à vous parler !* (M. Arland, *L'Ordre*)

b) ?? Moi qui reste à vous parler !

---

[1] 朝倉(1984)に記載されている喜びを表す例：C'est vraiment une joie de vous avoir rencontrée à ce concert. *Moi qui m'ennuyais tant !* (J. Green, *Adrienne Mesurat*)

⇒＜moi+擬似関係節＞と＜et moi+擬似関係節＞には意味上の違いがあることが推測されるが、この点について明らかにした研究は現在のところ見当たらない。

辞典の中には接続詞« et »の項目で(6)を挙げ、「文頭に置かれた強調用法」と説明しているものあり。しかし、この「強調用法」という説明からは、＜moi+擬似関係節＞と＜et moi+擬似関係節＞の違いは判然としない。

(6) *Et moi qui ne me doutais de rien !*

「まったく私はなんにも気づいていなかったのですよ」（『ロベール仏和大辞典』小学館）

朝倉(1984)：例(3)の＜et+名詞句＋擬似関係節＞にも「自分の考えと事実との食い違い」すなわち対立の意味あり。

(7)（話し手はテーブルに登り、壁紙を貼り付けようとしているがうまくいかず、おまけにテーブルはぐらつき始める）

Merde !... *Et cette table qui est mal équilibrée.*

（*Monsieur Ripois*, film de R. Clément, 1954）

しかし、同じ＜et+名詞句＋擬似関係節＞の(7)：壁紙がうまく張り付かないという前提事実への追加情報であり、対立の意味はない。

【本発表の目的】：

- ＜moi＋擬似関係節＞と＜et moi＋擬似関係節＞の比較を通じて＜et moi＋擬似関係節＞には et が必須なものと、et を付けても付けなくてもよいものがあることを示す。
- et が必須なものとそうでないものに分かれる理由は、先行発話・状況と言語化された部分の関係性が異なることにある旨を主張する。そのうえで、＜et moi＋擬似関係節＞における et の役割を明らかにする。
- ＜名詞句＋擬似関係節＞と＜et＋名詞句＋擬似関係節＞の比較を行い、＜et＋名詞句＋擬似関係節＞における et の働きを導き出す。

1. 接続詞 et の基本的な働き

仏仏辞典の « et »の項：

☆*Larousse de la langue française lexis (1977)*：et の基本的な意味は(i)「付け加えること」。付加、対比、対立の意味を有しうる。(ii)発話冒頭（しばしば強勢形人称代名詞の前で用いられる）で使用される et は、強調の意味をもつ。

Larousse de la langue française lexis[2)]：

« Indique une adjonction, qui peut avoir valeur d'addition, de comparaison ou d'opposition. »

[2)] *Dictionnaire du français contemporain (1966)* の « et »の項に記載されている内容と同一。

« Et, en tête de l'énoncé, est un renforcement emphatique (souvent employé devant un pronom personnel tonique) : *Et moi, vous ne me demandez pas mon avis ? Et soudain la porte s'ouvrit. Et voilà, nous sommes arrivés.* »

Larousse de la langue française lexis の(ii)の意味について、他の仏仏辞典ではどのような説明がなされているか？

☆*Le Grand Robert de la langue française (1985)* : 文頭に置かれた et は強調を表すとのみ記載。

Le Grand Robert de la langue française :

« Au début d'une phrase, avec une valeur emphatique. *Et voici que tout à coup il se met à courir. Et Jésus dit à ses disciples... Et vous ne ferez rien pour vous disculper ? Et moi je vous affirme que...* »

☆*Grand Larousse encyclopédique en dix volumes (1961)* : 文頭に置かれた et は対立や驚き・憤りを際立たせる。

Grand Larousse encyclopédique en dix volumes :

« En tête de phrase, fait ressortir une opposition : *Et moi, je vous soutiens que mes vers sont fort bons* (Molière) ; un sentiment d'étonnement ou d'indignation : *Et vous prononcerez un arrêt si cruel !* (Racine). »

５種の仏仏辞典の « et »の項には、＜et moi＋擬似関係節＞や＜et＋名詞句＋擬似関係節＞の例文の記載はひとつもなし。文頭に置かれた et の働きについては、どの辞典においても「強調用法」と説明。

☆石野(2013) : 接続詞 et の基本的な働きは「列挙」と「追加」であり、後にくる内容によって、et が順接的に捉えられたり、逆説的に捉えられたりする。対立の et は mais とは異なり、2 つの事柄をほぼ対等に結びつけているだけで、et 自体には対立の意味はない。そのため、結論を相手に委ねてしまっている投げやりな感じがする。それがかえって、皮肉や憤慨などの情動的なニュアンスを生じているといえる。

2. ＜moi＋擬似関係節＞と＜et moi＋擬似関係節＞

＜moi＋擬似関係節＞と＜et moi＋擬似関係節＞の比較を通じ、＜et moi＋擬似関係節＞には et が必須なものと、et を付けても付けなくてもよいものがあることを示す。

2.1. ＜moi＋擬似関係節＞構文の意味

(8)（話し手は恋人から夏休みに島に一緒に行こうと誘われていた。しかし、恋人が同じ

提案を他の女性二人にもしていたことが判明する）

Me voilà en troisième position ! *Moi qui te croyais naïf !*

（*Conte d'été*, film d'E. Rohmer, 1995）

(8)：話し手は恋人をうぶな人だと思っていたが、実際には自分以外の二人の女性に同じ旅行話を持ちかけていたことが判明。「私は三番手というわけね。あなたのことをウブな人だと思っていたのに」と恋人を非難。

(9)（告白をされたが好意に応えられない旨を伝えると、相手は気を悪くする。その様子を見て）

J'ai toujours eu peur de faire aux gens la moindre peine et, malgré moi, je fais du mal. *Moi qui aimerais tant que tout s'arrange, que tout le monde soit heureux.*

（*Lola*, film de J. Demy, 1961）

(9)：自分の意に反し他人を苦しめてしまう話し手は、「すべてがうまくいき、皆が幸せであることをこんなにも望んでいるのに」と嘆いている。

★＜moi＋擬似関係節＞：話し手が頭の中で思い描いていた「あるべき世界」（以下、「**予想・信念世界**」とする）と、発話の場で知覚した事態が支配する世界（以下、「**現実世界**」とする）の間にズレを感じたことを契機とし用いられる構文。「予想・信念世界」と「現実世界」の間の対立関係を表す[3]。

【疑問】：＜et moi＋擬似関係節＞は、どのような内容を表すか。

(10)（ある晩、話し手は Cazeneuve たちから暴行を受ける。暴行犯たちの中に « elle »がいたことを知った話し手は、誰が « elle »を丸め込んだのか考える）

Qui ? Cazeneuve ? Lecyfre ? Et pourquoi les a-t-elle crus ? *Et moi qui pensais qu'elle m'avait à la bonne !* (D. Pennac, *Au bonheur des ogres*)

(10)：話し手は、「彼女」が話し手を襲った暴行犯の一味だったことを知り、「彼女は僕に好意をもっていると思っていたのに」と驚いている。

(11)（話し手は、聞き手が恋い焦がれていた男性と付き合い始め、罪悪感を抱いていた。ところが同じ頃、聞き手は話し手の恋人と関係を持っていたことが判明する。）

Eh bien, tu ne perds pas ton temps ! Tu avais pris les devants ! (...) *Et moi qui croyais te tirer dans les pattes !* （*L'Ami de mon amie*, film d'E. Rohmer, 1987）

(11)：聞き手は、話し手の恋人と話し手の知らぬ間に恋愛関係になっており、いわば「先手を打っていた」。話し手は「私があなたの恋路の邪魔をしているとばかり思っていたのに」と聞き手をやや非難。

---

[3] ＜moi＋擬似関係節＞の機能についての詳細は、小川(2020)を参照されたい。

(10), (11)共に、話し手は「予想・信念世界」と「現実世界」のズレを嘆いている。
⇒＜et moi＋擬似関係節＞も＜moi＋擬似関係節＞同様、「予想・信念世界」と「現実世界」の間の対立関係を表すと推測。

(8), (9)には et を前置し＜et moi＋擬似関係節＞に言い換え（(8'), (9')参照）、(10), (11)からは et を省いて＜moi＋擬似関係節＞に言い換え（(10'), (11')参照）インフォーマントに確認⇒ 言い換え後の表現も、言い換え前の表現と同じ意味で使用可能。

(8') Et moi qui te croyais naïf !

(9') Et moi qui aimerais tant que tout s'arrange, que tout le monde soit heureux.

(10') Moi qui pensais qu'elle m'avait à la bonne !

(11') Moi qui croyais te tirer dans les pattes !

＜moi＋擬似関係節＞と＜et moi＋擬似関係節＞には、意味上の違いはないようにも思われる。しかし、＜et moi＋擬似関係節＞のすべてが＜moi＋擬似関係節＞に言い換え可能というわけではない。

2.2. ２種類の＜et moi+擬似関係節＞

インフォーマントによると、(12), (13), (14)の各 a)の＜et moi＋擬似関係節＞から et を省き b)の＜moi＋擬似関係節＞にすると、意味が通じなくなる。

(12)（娘から妊娠していることを告げられた母親が）

Tu te sens bien, au moins ? Tu n'as pas de nausées ?

a) *Et moi qui t'ai laissé la chaise de paille*, prends un coussin, pour soutenir ton dos ! (B. Hemmerlin, *Maman solo - Le guide de la mère célibataire*)

b) ?? Moi qui t'ai laissé la chaise de paille, prends un coussin, pour soutenir ton dos !

(12) : 話し手は娘が妊娠していることを知り、娘の体をいたわってやるべきだといういわば話し手がすべきこと、またはあるべき事態（以下「**期待世界**」とする）を連想する。しかし現実には、娘を藁の椅子に座らせてしまったということに気付き、「私ったら、おまえを藁の椅子に座らせるだなんて」のように自分の行動を嘆いている。

(13)（奥様は風邪気味で、暖炉の側に座り薪を足でいじっている。そこへ小間使いがやってきて）

— Madame se reposait ? Madame a entretenu le feu ?

Et soudain：

a) — Oh ! *et moi, sotte, qui ai laissé la porte entr'ouverte !* (M. Arland, *L'Ordre*)

b) — ?? Oh ! moi, sotte, qui ai laissé la porte entr'ouverte !

(13)：暖炉の側にいる奥様を見た話し手は「奥様は寒がっている」と考える。そこから自然と繋がる「部屋を暖めるべきだ」という「期待世界」に反し、現実にはドアを半開きにしたままだということに気付き、「私ったらばかね、ドアを半開きにしたままだなんて」と嘆いている。

(14)(=(5))

Mais Monsieur doit avoir faim.

a) *Et moi qui reste à vous parler !*

b) ?? Moi qui reste à vous parler !

(14)：話し手は帰宅した旦那様の様子を見て、旦那様は空腹だと想像する。そこから自然と結びつく「食事の用意をすべきだ」という「期待世界」に反し、「私ったら、おしゃべりばかりしているだなんて」と自分の行動を嘆いている。

★「**絶対型**」：(12)-(14)のような et を省くことのできない＜et moi+擬似関係節＞。日本語の「～ナンテ」に対応することが多い。
★「**柔軟型**」：(10), (11)のような et を省いても文の意味が変わらない＜et moi+擬似関係節＞。日本語の「～ノニ」に対応することが多い。

【疑問】：絶対型と柔軟型では、話し手の思考・推論の流れにどのような違いがあるか。

(15) ＜柔軟型＞

Et moi qui pensais qu'elle m'avait à la bonne ! (例(10))

(I) Elle m'a à la bonne.（予想・信念世界①）[言語化]

↓

(II) Elle ne doit pas me faire de mal.（予想・信念世界②）

↕（対立）

(III) Elle m'a attaqué.（現実世界）

(15)：話し手は「彼女」が暴行犯の一味だったことを知り（(III)「現実世界」）違和感を抱く。なぜなら「彼女」は自分を傷つけるはずがない（(II)「予想・信念世界②」）と思っていたから。「予想・信念世界②」の根拠となっているのが、「「彼女」は自分に好意をもっている」という話し手の推測（(I) 「予想・信念世界①」）。

★柔軟型：(II)「予想・信念世界②」と(III)「現実世界」の間の対立を表しており、言語化されているのは(I)、すなわち「予想・信念世界②」を導く「予想・信念世界①」。

(16) ＜絶対型＞

Et moi qui t'ai laissé la chaise de paille (...) !（例(12)）

(I) Tu es enceinte.（現実世界①）

↓

(II) Je dois prendre soin de toi.（期待世界）

↕（対立）

(III) Je t'ai laissé la chaise de paille.（現実世界②）[言語化]

(16)：発話の場で話し手は娘の妊娠を知る（(Ⅰ)現実世界①)。その事実から自然と導かれる「自分は娘をいたわってやるべきだ」((Ⅱ)期待世界）という内容に反し、実際の自分は「娘を藁の椅子に座らせた」という事実（(Ⅲ)現実世界②）に気付く。

★絶対型：(II)「期待世界」と(III)「現実世界②」の間の対立が表されており、言語化されているのは(III)「現実世界②」。

★＜柔軟型と絶対型＞

- 共通点：(II)「予想・信念世界②」または「期待世界」という話し手の頭の中に存在する世界と(III)「現実世界」の間の対立を表現。
- 相違点：言語化されているのが柔軟型では(I)「予想・信念世界①」であるのに対し、絶対型では(III)「現実世界②」。

⇒言語化されている部分が異なるということが、接続詞 et が必須かそうでないかの別と密接に関係しているのではないか？

3. 柔軟型と絶対型の性質の差異

・先行発話・状況と言語化された部分の関係性という観点からの分析。

・絶対型ではなぜ et が必須であるのか＝「絶対型における et の役割はなにか」。

3.1. Cadiot (1976)

【疑問】：＜et moi＋擬似関係節＞および＜et＋名詞句＋擬似関係節＞は、どのような場面で用いられる表現か。

Cadiot (1976)：＜et＋名詞句＋擬似関係節＞（(17)参照[4]）は « toujours dans une situation de dialogue (en tant que réponse ou réaction) »で用いられる表現。

⇒ ＜et＋名詞句＋擬似関係節＞は対話的性格を有しており、何らかの発言に対し返答をする場面や、何らかの事態が生じ、それに対し反応する場面で用いられる。

[4] Cadiot(1976)は、＜et＋名詞句＋擬似関係節＞構文について、et 以外にも encore や à nouveau が用いられるとする。

(17) Et Paul qui arrive !
Et Paul qui n'arrive pas !
Encore Pierre qui frappe à la porte !
A nouveau Pierre qui frappe à la porte ! (Cadiot 1976)

★＜et moi＋擬似関係節＞および＜et＋名詞句＋擬似関係節＞：
・ 対話の場面で返答や反応として使用されていることが殆ど。
・ 独り言の例の場合でも、何らかの事態についての反応（例(7), (10)）。
⇒ 柔軟型と絶対型の性質の違いを分析するに際し、対話または独り言の場面で何が「返答」や「反応」の前提事実、すなわち＜発話の引き金＞(déclencheur)になっているかに着目することが重要。
「発話の引き金」と、それに対する「返答」や「反応」として現れた＜言語化された内容＞の関係を考察⇒ 柔軟型と絶対型の性質の違い、ひいては絶対型における et の役割を解明できる。

3.2. 思考・推論の流れと言語化の関係

柔軟型と絶対型について、それぞれの思考・推論の流れと言語化の関係を考察⇒ 絶対型における接続詞 et の働きを導き出す。

★＜柔軟型＞
Et moi qui pensais qu'elle m'avait à la bonne ! (=(10))
(I) Elle m'a à la bonne.（予想・信念世界①）[言語化]
↓
(II) Elle ne doit pas me faire de mal.（予想・信念世界②）
↕（対立）
(III) Elle m'a attaqué.（現実世界）[発話の引き金]

発話の引き金＝(III)「彼女から暴行を受けた」という現実世界。
(III)「彼女から暴行を受けた」という事実と(II)「彼女が自分を傷つけるはずはない」という話し手の思いが対立。(II)「彼女が自分を傷つけるはずはない」という思いは、(I)「彼女は自分に好意をもっている」という話し手の推測から導かれる。(II)と(III)は部分的にではなく完全な対立関係にある。

Et moi qui croyais te tirer dans les pattes ! (=(11))
(I) Je te tire dans les pattes.（予想・信念世界①）[言語化]
↓
(II) Tu n'es pas heureuse dans ta vie sentimentale.（予想・信念世界②）
↕（対立）
(III) Tu es heureuse dans ta vie sentimentale.（現実世界）[発話の引き金]

発話の引き金＝(III)「あなたは幸せな恋愛をしている」という現実世界。
(III)「あなたは幸せな恋愛をしている」という事実と(II)「あなたは幸せな恋愛をしていない」という話し手の推測が対立。(II)「あなたは幸せな恋愛をしていない」という推測は(I)「私はあなたの恋路の邪魔をしている」という話し手の思いから導かれる。(II)と(III)は部分的にではなく完全な対立関係にある。

★＜絶対型＞
Et moi qui t'ai laissé la chaise de paille (...) ! (=(12))
(I) Tu es enceinte.（現実世界①）[発話の引き金]
↓
(II) Je dois prendre soin de toi.（期待世界）
↕（対立）
(III) Je t'ai laissé la chaise de paille.（現実世界②）[言語化]

発話の引き金＝(I)「おまえは妊娠している」という現実世界。
(I)「おまえは妊娠している」→ (II)「だから私はおまえをいたわってやるべきだ」→ (III)「なのに私はおまえをいたわってやらないばかりか、藁の椅子に座らせた」という意味の連鎖。

(II)「だから私はおまえをいたわってやるべきだ」
↕ (対立)
(III)「なのに私はおまえをいたわってやらないばかりか、藁の椅子に座らせた」

(II)と(III)は、波線部については対立関係にあるが、(III)では「～ないばかりか、藁の椅子に座らせた」という意味の累加が見られる。この意味の「累加」が存在することにより、絶対型には接続詞 et が必要となるのではないだろうか。

Oh ! et moi, sotte, qui ai laissé la porte entr'ouverte !（=(13)）

(I) Madame a froid.（現実世界①）[発話の引き金]

↓

(II) Je dois chauffer la pièce.（期待世界）

↕ (対立)

(III) J'ai laissé la porte entr'ouverte.（現実世界②）[言語化]

発話の引き金＝(I)「奥様は寒がっている」という現実世界。

(I)「奥様は寒がっている」→ (II)「だから私は部屋を暖めるべきだ」→ (III)「なのに私は部屋を暖めないばかりか、ドアを半開きにしたままだ」とう意味の連鎖。

(II)「だから私は部屋を暖めるべきだ」

↕ (対立)

(III)「なのに私は部屋を暖めないばかりか、ドアを半開きにしたままだ」

(II)と(III)は、波線部については対立関係にあるが、(III)では「～ないばかりか、ドアを半開きにしたままだ」という意味の「累加」が見られる。

★【まとめ】

- 絶対型では部分的な対立の意味に加えて「累加」の意味が言語化される必要性から、接続詞 et の使用が必須となる。
- 柔軟型では完全な対立が見られる⇒ et はあってもなくてもよい。
- 完全な対立が見られる場合には et はなくてもよいという根拠：＜moi＋擬似関係節＞という構文自体が「対立」を表す。

例(13)の « sotte »という語の挿入：

- 柔軟型、絶対型を問わず、＜moi+擬似関係節＞を用いた表現は形式的には名詞句。主語についての述定を行わず、文を途中で言いさす⇒ 感情を表出する文として用いられることが多い。
- 特に絶対型は、現実世界①を認識したことを契機とし、自己の現在進行形の行為または既遂の行為（現実世界②）に気付き、これを嘆く表現⇒ « sotte »のような挿入句が用いられやすい[5]。

[5] 例として、Et moi *imbécile*, qui allais consulter Mme de Rênal, qui la priais de parler au précepteur ! (Stendhal, *Le Rouge et le Noir*)（後掲(30)）

4. ＜名詞句＋擬似関係節＞と＜et＋名詞句＋擬似関係節＞の比較

＜名詞句＋擬似関係節＞と＜et＋名詞句＋擬似関係節＞の比較を行うことで、＜et＋名詞句＋擬似関係節＞における接続詞 et の働きを明らかにする。

4.1. ＜名詞句＋擬似関係節＞の性質

朝倉(1984)：(18)のような＜et＋名詞句＋擬似関係節＞には対立の意味あり。

(18)=(3) *Et votre mère qui vous croit si calme !*

【疑問】: et の付かない＜名詞句＋擬似関係節＞が対立を表すことはあるか。

☆眼前描写文

(19)（話し手が婚約者である子爵と庭を散歩していると、リゾン叔母さんが窓辺に立ち自分たちを見ていることに気付く）

Tiens, dit-elle, *tante Lison qui nous regarde*. (G. Maupassant, *Une vie*)

(19) : 話し手はリゾン叔母さんが自分たちを見ているという眼の前の事態を淡々と述べている。

(20)（内気で普段、親しくない人と遊んだりしない Laurine が遊んでいるのを母親(Mme de Marelle)が目撃する）

Mme de Marelle entra et, stupéfaite : - Ah ! Laurine... *Laurine qui joue...* Vous êtes un ensorceleur, monsieur. (G. Maupassant, *Bel-Ami*)

(20) : 話し手は、Laurine が親しくない人と遊ぶとは想定していなかったことから、Laurine が遊んでいるという事実に驚いている⇒ 対立あり。

☆眼前描写文以外の文タイプ

(21)（話し手の母親はオシャレで年齢よりも若く見える。息子は友人の前で、そんな母親をよくからかっていた）

Maman, disait-il, qui est, comme chacun sait, si coquette... (M. Arland, *L'Ordre*)

(21) : 話し手の母親は、実際にも見た目に常に気を遣っており年齢よりも若く見える⇒ 対立の意味なし。

(22)（話し手は夜間郵便飛行のパイロット。以前、悪天候のなか引き返したことについてリヴィエール社長に「怖かったのか？」と聞かれたことがある。ある夜、別の便が行方不明になった直後に飛ぶことになった話し手は全身に力をみなぎらせ、笑みを浮かべながら）

Cet imbécile de Rivière qui m'a... qui s'imagine que j'ai peur !

(A. Saint-Exupéry, *Vol de nuit*)

(22) : 話し手は発話時には恐怖を感じていないのに、リヴィエール社長は話し手が今回も怖がっていると思っている⇒ 対立あり。

★et の付かない＜名詞句＋擬似関係節＞は、眼前描写文（例(19), (20)）であるか、それ以外の文タイプ（例(21), (22)）であるかを問わず、場合によっては対立を表すこともある。
⇒ ＜名詞句＋擬似関係節＞を用いて対立を表現するには、(18)のように et を付けねばならないというわけではない。

4.2. ＜et＋名詞句＋擬似関係節＞における接続詞 et の働き

【疑問】：＜et＋名詞句＋擬似関係節＞の et は何を表すのか。

(23)=(7) Merde !... *Et cette table qui est mal équilibrée.*

(23)：話し手は思うように壁紙を貼ることができずイライラしており、さらにそのマイナスな感情を促進させる別の事態（テーブルがぐらつく）を、et を用いて追加して述べている。

(24)（話し手は同居人と仕方なく友人の赤ん坊の世話をしている。赤ん坊を抱え、てんてこ舞いの中、管理人がやってくる。やっとの思いで管理人を追い払うも、同居人は薬局へ行ったきり戻らない）

Quel pot de colle. *Et l'autre zouave qui revient pas...*

（*Trois hommes et un couffin*, film de C. Serreau, 1985）

(24)：赤ん坊の世話でてんてこ舞いの中、訪ねて来た管理人にしつこくされた話し手が、さらなる厄介な事態として、同居人が薬局へ行ったきり戻らないことを追加して述べている。

★(23)と(24)：既に述べた内容と同一方向に論を進める情報追加の et。

★(25)-(27)：二つの事態の対立を表す。

(25)=(3)（Yvonne はおとなしく信仰にあついため、母親は娘を時々「尼さん」と呼んでいる。この日 Yvonne は Renée の前で、驚くほどにお転婆な様子を見せる）

Yvonne, folle ! s'écria Renée. *Et votre mère qui vous croit si calme !*

(M. Arland, *L'Ordre*)

(25)：Yvonne が驚くほどにお転婆であることと、Yvonne の母親は娘をとても物静かな子だと思っていることとの対立。

(26)（愛する女性 Arlette が収監されたと聞き）

Arlette en prison... Et tous les coupables qui courent les rues... C'est ça le vrai scandale !

（*Stavisky*, film d'A. Resnais, 1974）

(26)：罪のない Arlette は収監されているというのに、犯罪者たちは通りを歩き回っているという対立関係。

(27)（飲むと喧嘩っ早くなるジャン＝クロードがバーに出かけた。その直後に彼の母親から電話があり、息子がレインコートを忘れて出かけたことが心配だという）

(...) Et sa mère qui s'inquiétait parce qu'il avait oublié son imperméable ! Pauvre femme ! (R. Grenier, *La salle de rédaction*)

(27)：母親は、息子がまた喧嘩をしまいか心配すべきなのに、息子がレインコートを忘れて出かけたことを心配しているという対立関係。

【疑問】：(28)と(29)の et はどのような働きをしているか。

(28)（thé dansant の会場では、母親たちはおしゃべりをしながら子どもたちがダンスを踊っている様子を見ている。男の子よりも女の子が多く、中には女の子同士で踊っている子もいる。それを見た話し手が）

Toutes lesbiennes ! C'est quand même malheureux... *Et les mères qui regardent ça avec un bon sourire !* Quelle époque !

(*Le Souffle au cœur*, film de L. Malle, 1971)

(28)：話し手は、女の子同士で踊ることを« malheureux »だと捉えているが、女の子たちの母親はそんな娘たちを微笑んで眺めている⇒ et は、２つの事態の対立を示す。しかし、「それなのに母親たちは微笑んで眺めているなんて」だけではなく、「おまけに母親たちは微笑んで眺めているなんて」という追加の意味で解釈することも可能。

(29)（夢にまでみた夫の出世が決定的になると、話し手には毎晩仲間が集う居間の家具が急にみすぼらしいものに思えてくる）

Brusquement, elle s'arrêta au milieu de la pièce et, jetant un long regard sur le mobilier fané：

Bon Dieu ! dit-elle, que c'est laid ici ! *Et tout le monde qui va venir !*

(E. Zola, *La Fortune des Rougon*)

(29)：話し手は、自宅の居間が社会的地位を有する一家のものにしてはみすぼらしいと感じている。「ここは、なんてみすぼらしいの！それなのに皆さんがいらっしゃるだなんて！」だけではなく、「ここは、なんてみすぼらしいの！おまけに皆さんがいらっしゃるだなんて！」のように、困惑する事態を追加しているようにも解釈可能。

【まとめ】：

- ＜et＋名詞句＋擬似関係節＞が表しうる意味：(i)追加、(ii)対立、(iii)追加とも対立ともとれる場合あり。
- ＜et＋名詞句＋擬似関係節＞における et の働き：石野(2013)が述べるように、基本的には「追加」を表す。et の後ろにくる内容が逆説的⇒「対立」の意味。聞き手の解釈によっては基本的な「追加」の意味で受け取られる場合もあれば、「対立」を意味すると

解釈されることもある。

➢ ＜et＋名詞句＋擬似関係節＞の例にはすべて何かしらの文や間投詞が前置[6]。et が「追加」を基本的な意味としていることの裏付け。

5. ＜moi＋擬似関係節＞、絶対型＜et moi＋擬似関係節＞、＜et＋名詞句＋擬似関係節＞で用いられる動詞の種類と時制の傾向

★＜moi＋擬似関係節＞（柔軟型＜et moi＋擬似関係節＞を含む）

・Moi qui te croyais naïf ! (=(8))

・Moi qui aimerais tant que tout s'arrange, que tout le monde soit heureux. (=(9))

・Et moi qui pensais qu'elle m'avait à la bonne ! (=(10))

・Et moi qui croyais te tirer dans les pattes ! (=(11))

・Moi qui voulais sortir ! (E. Zola, *La joie de vivre*)

・Moi qui t'avais prise pour une femme ! (E. Zola, *La fortune des Rougon*)

・Moi qui aime tant l'empereur et les Francais ! (Stendhal, *La chartreuse de Parme*)

＜moi＋擬似関係節＞（柔軟型＜et moi＋擬似関係節＞を含む）：

✧ 話し手の予想・信念世界を言語化した表現。

✧ 動詞の種類：penser, croire 等の思考動詞、vouloir, aimer 等の要望・好みを表す動詞が多い。

✧ 時制：半過去形の頻繁な使用。現在形、大過去形、条件法現在形もあり。

★＜et＋名詞句＋擬似関係節＞

・Et cette table qui est mal équilibrée. (=(7))

・Et l'autre zouave qui revient pas... (=(24))

・Et votre mère qui vous croit si calme ! (=(25))

・Et tous les coupables qui courent les rues... (=(26))

・Et sa mère qui s'inquiétait parce qu'il avait oublié son imperméable ! (=(27))

・Et les mères qui regardent ça avec un bon sourire ! (=(28))

・Et tout le monde qui va venir ! (=(29))

・Et Renée qui semblait me donner tort hier ! (M. Arland, *L'Ordre*)

・Et ce diable d'Eugène qui ne m'écrit pas ! (E. Zola, *La Fortune des Rougon*)

・Et cette bête qui ne me prévient pas ! (E. Zola, *La Bête Humaine*)

---

[6] 発話冒頭に現れる＜et＋名詞句＋擬似関係節＞の例もひとつ見つかった：*Et Renée qui semblait me donner tort hier !* (M. Arland, *L'Ordre*) この例では、聞き手のセリフに追加する形で、この文が発話されている。

＜et＋名詞句＋擬似関係節＞：
et を用いて現実世界を「追加」して述べる表現⇒ 使用される時制は現在形が最も多い。
半過去形も見られるが、半過去形には事態を生き生きと描く働きあり⇒ 現在志向。

★絶対型＜et moi＋擬似関係節＞
・Et moi qui reste à vous parler ! (=(5))
・Et moi qui t'ai laissé la chaise de paille (...) (=(12))
・Oh ! et moi, sotte, qui ai laissé la porte entr'ouverte ! (=(13))

(30)（話し手はレナール夫人の小間使い。家庭教師に恋をし、結婚を申し込むが断られる。その家庭教師がレナール夫人と愛人関係にあることを知り）
Et moi imbécile, qui allais consulter Mme de Rênal, qui la priais de parler au précepteur ! (Stendhal, *Le Rouge et le Noir*)

(31)（死刑囚は独房の壁に「ボリ—共和制[7]」と記されているのを目にし、思想のためにギロチンにかけられた青年と、犯罪を犯した自分を比較する）
Pauvre jeune homme ! (...) Et moi qui me plaignais, moi, misérable qui ai commis un véritable crime, qui ai versé du sang !
(V. Hugo, *Le Dernier Jour d'un condamné*)

絶対型＜et moi＋擬似関係節＞：
✧ 思考動詞や要望・好みを表す動詞を用いている例は見当たらない⇒ ＜moi＋擬似関係節＞（柔軟型＜et moi＋擬似関係節＞を含む）とは大きく異なる。
✧ (12), (13)：複合過去形の使用。(12)の話し手は娘が座っている藁の椅子を、(13)の話し手は半開きのドアを見て発話しており、過去の話し手の行為の結果状態が発話の場で描かれている⇒ 現在志向が強い。
✧ (30), (31)：半過去形の使用。恋敵だとも知らずにレナール夫人に相談に行き、家庭教師に自分のことを話してくれるように頼んだこと（(30)参照）、まさに罪を犯し、他人の血を流した非道な自分が死刑になることを嘆いていたこと（(31)参照）、これら過去の自分の行為を発話の場で想起し、ありありと思い描いている⇒ 現在志向。

★絶対型＜et moi＋擬似関係節＞と＜et＋名詞句＋擬似関係節＞は共に「現実世界」のある事実を「追加」して述べる表現であると主張。
★絶対型＜et moi＋擬似関係節＞と＜et＋名詞句＋擬似関係節＞には動詞の種類や時制に関し共通点が多い⇒ 本発表の主張の裏付け。

---

[7] ラ・ロシェルで、共和派の陰謀を企てたことにより、1822 年 9 月、4 人の下士官が死刑となった。ボリはその首領格。

6. おわりに

- ＜et moi＋擬似関係節＞構文に関しては、従来、接続詞 et の「文頭に置かれた強調用法」、あるいは＜moi＋擬似関係節＞同様、「対立を表す」という説明のみがなされてきた。
- これまで＜moi＋擬似関係節＞と＜et moi＋擬似関係節＞の意味の違いは明らかにされておらず、また＜et moi＋擬似関係節＞については本発表でいう「絶対型」と「柔軟型」のように、２種類のタイプがあるということにも触れられてこなかった。
- 本発表では、これまで明らかにされてこなかった＜et moi＋擬似関係節＞における接続詞 et の役割は何かを解明⇒ 柔軟型では et はあってもなくても構わないが、絶対型では意味の「累加」を表すために et が必須である。
- 先行研究では対立を表すと説明されてきた＜et＋名詞句＋擬似関係節＞について。この構文は対立のみを表すのではなく、et の基本的機能である「追加」を原点とし、聞き手が et に後続する内容をどう捉えるかにより意味が異なる。

[参考文献]

Bally, Ch. (1932) *Linguistique générale et linguistique française*. Berne：Francke.

Cadiot, P. (1976) *Relatives et infinitives "déictiques" en français*. DRLAV 13.

朝倉季雄(1984)『フランス文法メモ―基本語の用法―』白水社.

石野好一(1983)「等位接続詞 et, ou, ni について」『サピエンチア（英知大学論叢）』17, 167-86.

石野好一(2013)「et の対立，mais の対立」『フランス語学研究』47, 37-43.

小川彩子(2016)「Il y a Y qui + V 構文と X avoir Y qui + V 構文の働き―＜名詞句(Y) + qui + 動詞句＞型表現の分析を通じて」『フランス語学研究』50, 1-21.

小川彩子(2020)「＜Moi + 擬似関係節＞型構文と脱従属化」『フランス語学研究』54, 23-43.

[仏仏辞典]

Dubois, J. et al. (1966) *Dictionnaire du français contemporain*, Librairie Larousse.

Dubois, J. et al. (1977) *Larousse de la langue française lexis*, Librairie Larousse.

Imbs, P. (1980) *Trésor de la langue française, dictionnaire de la langue du XIXe et du XXe siècle (1789–1960), Tome huitième,* Centre national de la recherche scientifique.

Librairie Larousse (1961) *Grand Larousse encyclopédique en dix volumes, tome quatrième*.

Robert, P. (1985) *Le Grand Robert de la langue française, Dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française*, *Tome IV,* 2ème édition, Le Robert.